

『緋文字』におけるパフォーマンス表象

ホーソーンの演劇的／観劇的想像力

川下 剛

1. 序

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の『緋文字』(*The Scarlet Letter*) は、1850 年に出版されると瞬く間に舞台化、オペラ化へと目に見える物語として人々に受容されており、これまでも多くの批評家がその舞台性、演劇性を指摘してきた。『緋文字』執筆前後のホーソーンは、地元紙に劇評を寄稿しているだけでなくパントマイムの舞台へ出かけているため、台詞のある演劇だけでなく無言劇のパフォーマンスにも興味を持っていたと言える。実際『緋文字』では、言語による真実の告白を拒むヘスター、真実を告白しても誤解を招くディムズデルによって言語による非伝達性が強調されており、彼らが晒し台の上で行うのは言葉が重視される演劇というよりも、非言語的な表現によって何かを伝えようとするパフォーマンスに近い。

そこで本発表では、パフォーマンスという概念を手掛かりに、従来の演劇的な観点からだけでは見えなかった『緋文字』における非言語的なパフォーマンスが表象する意味を読み解いた。

2. パフォーマンスとは何か

高橋雄一郎はパフォーマンスを3つの枠組みに分類している。まず1つ目は、映画、演劇、ダンスなど、観客が見ることを前提とした「舞台芸術、芸能として捉えられるパフォーマンス」(高橋 18)である。2つ目は、人が社会生活を送る上で演じる社会的役回りや行動をパフォーマンスとして捉える「日常生活におけるパフォーマンス」である。3つ目は、各国の儀礼や慣習に根差した「文化的パフォーマンス」である。これらに共通するのは、パフォーマンスを行う者は「私」ではない別の何かを演じているということ、そしてパフォーマンスはそれを見る者に対して何らかの知的、感覚的、精神的影響を与えるということである。

パフォーマンスについてリチャード・シェクナー (Richard Schechner) は、「芸術、儀式、日常生活におけるパフォーマンスは『再現された行為』、つまり『2度行われた行為』であり、練習やリハーサルを通して演じられた行為である (Performances—of art, rituals, or ordinary life—are “restored behaviors,” “twice-behaved behaviors,” performed actions that people train for and rehearse.)」(Schechner 28)と定義している。つまり、パフォーマンスとは「再現された行為」であり、はじめて行うものはパフォーマンスではない。それゆえ、ヘスターが緋文字を晒す行為は姦通という罪に対する罰であり、パフォーマンスとは呼べない。一方、ディムズデルの行為は、晒し台におけるヘスターの罰を原光景として、再編集を施した「再現された行為」であると言える。従って、本論ではディムズデルのパフォーマー性、そして彼の行為のパフォーマンス性に注目する。

3. プレ・パフォーマンス

プレ・パフォーマンスとは、演出家や役者が試行錯誤をしながら、パフォーマンス全体の構成を考えたり、演じるべき「役」に入る準備段階のことを示す。言い換えれば、ワークショップやリハーサルである。『緋文字』でもディムズデルがプレ・パフォーマンスを行っているという場面があるので見てみたい。

ある夜、ディムズデルは近くを通りかかったヘスターとパールを呼び寄せ、3人で晒し台へと上る。この時パールは、明日のお昼にお母さんと私と一緒にここに立ってくれるか、と尋ねたのに対し、ディムズデルは、いつか必ず一緒に立つけど、それは明日ではない、と答えている。ここでパールがディムズデルに求めているのは、ただ昼間に晒し台の上に立つという行為である。しかしディムズデルにとっては、その行為自体が、自分の秘密を世間に知らしめることに繋がると考えている。従って、この会話では、言葉ではなく行為そのものが、見ている人々に真実を伝える媒体となりうるということが示唆されていると言える。それゆえ、3人の関係性を公にしたいパールにとって、この行為は人通りのある昼間に行なわなければならない。人目のないところで行う行為は本番の予行、すなわちリハーサルに過ぎないのである。

ディムズデルには2つの顔がある、という語り手の指摘は重要である。ディムズデルは人目のないところでは本来の自分でいられるが、人目のあるところでは牧師という「役」を演じていると言えるからである。実際、語り手はこの物語を「罪と悲しみの劇 (the drama of guilt and sorrow)」(253)と呼び、登場人物はみな「役者 (actors)」であると『緋文字』の演劇性を示唆している。しかし、罪の告白を行うディムズデルが世間に向けた顔は、この2つの顔のどちらでもなかった。彼は世間に対し、姦通を犯した罪人の「役」を演じるため

に、意図せず自分の中に潜んでいた悪魔的な一面を引き出すのである。そして罪の告白の当日、行列をなして教会へ向かうディムズデルは、ヘスターの目にも、パールが目にも、森で会った人とは別人のように映る。つまりディムズデルは晒し台で演じるべき「罪人の役」に入ったのである。

4. 罪の告白のパフォーマンス

ジェフリー・リチャーズ (Jeffrey H. Richards) によれば、ホーソンは、家、個室、庭、説教壇、晒し台など「文化的に適正な囲い (culturally pertinent enclosures)」を利用し、それらに舞台や劇場のような属性を与えている (36 - 37)。彼に従えば、『緋文字』では、至る所に舞台と観客が配置された演劇空間が描かれており、ディムズデルが罪の告白を行う教会の説教壇と広場の晒し台もそのような舞台のひとつだと言える。

説教壇でディムズデルが祝賀説教を始めた時、ヘスターは晒し台のすぐそばに立ち、教会の壁越しに耳を傾けていた。その際ヘスターは「聞き取れない言葉とはまったく無関係に (entirely apart from its indistinguishable words)」(243)言葉の音楽的な響きによって心から共感を覚え、彼が伝えたい思いを理解している。語り手は、ディムズデルの声は、罪を犯した人の心が同情と許しを求める哀願のように響き、その望みはかなえられたのであると述べている。つまり、ディムズデルは言葉の意味ではなく、その音楽的な響きによって罪の告白を行い、そこに居合わせた人々から罪の許しを得たのだと言える。このように感覚的な表現方法を利用して見るものに何らかの影響を与える行為はパフォーマンスと呼べる行為である。

教会を後にしたディムズデルは、ヘスターとパールを呼び寄せて晒し台へと上る。そしてディムズデルは「神の法廷 (the bar of Eternal Justice)」(254) で自分の罪を申し立てるかのように、広場に集まった人々の前で罪の告白を行う。教会で人類に対して罪の告白を行ったディムズデルは、次は晒し台を「神の法廷」に見立て、神に対して贖うべき罪の告白を行うのである。ディムズデルはまず、自分が7年前に立つべきだった場所に立っていること、そして一緒に立つべきだった女性がヘスターであることを告白する。そして、ヘスターの緋文字は自分の胸に刻まれたものの影に過ぎず、その胸の烙印でさえ自分の心の奥底を焼き焦がしたもののしるしに過ぎないと告白する。その証拠として、ディムズデルは牧師のたれえりを引きちぎり、胸に刻まれているはずの緋文字を世間に晒す。この場面において、ディムズデルは明らかにヘスターが緋文字を胸につけている意味、そしてそれを晒し台の上で晒す行為の意味を前提として、神の目を意識しながら自らの緋文字を露呈している。それゆえディムズデルの行為は、晒し台におけるヘスターの罰を再編集した「再現された行動」であると言え、神に対するパフォーマンスであると言える。このように、ディムズデルが公衆の面前で緋文字を露呈した行為は、観客を惹きつける劇的なパフォーマンスに見えるが、先に指摘したように、彼にとってはヘスターとパールを伴い晒し台に上がる行為自体が、自分の秘密を世間に知らしめるパフォーマンスなのである。

5. 結

ディムズデルの告白をめぐっては、一般の人々には真実として受け止められるが、地位の高い為政者や牧師には真実として受け止められていない。入子文子によれば、ウィンスロップの日記を読むと、1630年代、40年代の植民地では、牧師や総督、高級軍人は、姦通罪が確定しても、貴族階級の特別免除によってほぼ不問に処されている (入子 283)。つまり、教会での罪の告白と同じように晒し台での罪の告白でも、言語による非伝達性が前景化されているのである。このように『緋文字』を読んでみると、物語の真実はディムズデルの言葉ではなく、行為によって表現されている。言葉を扱う作家という職業とは矛盾しているようだが、人の心を描くホーソンは、言葉に頼らないパフォーマンスに近い表現方法を通して、人々の魂の交流を書き留めたのではないだろうか。そして言語から非言語的表現へと、視点を変えるパフォーマンス理論に依拠することによって、このようなホーソンの意図がより明らかになり、新たな『緋文字』の解釈も可能になるのではないだろうか。

引用文献

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter: The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, vol. 1. edited by William Charvat et al., Ohio State UP, 1962.

Richards, Jeffrey H. *Hawthorne and the Metaphor of Theatre*. U of North Carolina at Chapel Hill, 1981.

Schechner, Richard. *Performance Studies: An Introduction*. Routledge, 3rd ed., 2013.

入子文子. 『ホーソン・《緋文字》・タペストリー』南雲堂, 2004.

高橋雄一郎. 『身体化される知——パフォーマンス研究』せりか書房, 2005.